季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

P2　館長の２年間を振り返って思うことなど　押野　洋
P3　図書館昔々　山崎正伸
P4　思い出すままに　磯　水絵
P5　斯文会所蔵品の譲渡受入れについて　町泉寿郎
P6～8　新入生にお薦めの本　瀧田　浩　／　王 宝 平
堀野正人　／　小具龍史　／　岡田哲也
書評キャンパス
P9　【電子ジャーナル・電子書籍検索システム】を使ってみよう！
P10～11　Maruzen eBook Library を使いこなそう！
P12　本学教職員著書紹介

No.109

2021（令和３）年３月

館長の２年間を振り返って思うことなど

附属図書館長
国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　**押野　洋**

新型コロナウイルスのニュースが大々的に取り上げられるようになってちょうど一年、コロナは世界中の人々の生活を一変させました。図書館も同じです。図書館とは、図書・記録やその他の資料・情報を収集・整理・保管し、利用者の閲覧に供するための施設です。この一年は、コロナ禍の影響で利用者の閲覧もほとんどできない状態でしたので、図書館としては片翼飛行を余儀なくされました。図書館も非常事態が続いていますが、この２年間に館長として思ったことなどを以下に記してみたいと思います。

本学図書館で特筆すべきは貴重な資料を数多く所蔵している点です。2018 年には柏キャンパスに「二松学舎大学附属図書館資料センター」が設置され、貴重な資料の保管と研究スペースを確保しました。横溝正史旧蔵資料や寄託された大西巨人関連資料も本学が所蔵しています。今年も時に法人の支援を受けて、重要な資料を数多く購入することができました。大学資料展示室等での展示を今後予定していますので楽しみにして下さい。

昨年５月からのオンライン授業の開始に合わせて、図書館は５月中旬より大学院生・大学生に向けて図書貸し出しの配送サービスを始めました。さらに６月上旬からは、念願であったデータベース・電子ジャーナルの学外からの利用ができるようになりました。それらの中から 2020 年 12 月時点で利用頻度の高いものを５つ挙げてみます。JapanKnowledgeLib（百科事典系情報検索）、日経テレコン 21（日本経済新聞検索）、東洋経済デジタルコンテンツ・ライブラリー（雑誌コンテンツ）、聞蔵 II ビジュアル（朝日新聞検索）、ヨミダス歴史館（読売新聞検索）。これ以外にも数多くの多様なデータベース・電子ジャーナルを利用することが可能です。なかには同時アクセス数が制限されているものもありますが、図書の閲覧がままならない今こそ利用して下さい。

学生の皆さんにはさらに電子書籍を利用して頂きたいと思っています。就活を考えている学生はキャリアセンター主催の多種多様な講座と並んで、電子書籍のマイナビ出版の就活関連本や問題集を活用して下さい。最新の 2022 年度用の SPI から一般常識問題集、インターンシップ、エントリーシート、自己分析、面接自己 PR 志望動機、業界・企業研究、就活マナーまで就活のすべてをカバーしています。この他にも人文科学・社会科学・理工学・医学・農学まで 1308 点の電子書籍を取り揃えています。

今年度から九段図書館に書籍を殺菌する書籍消毒機を設置しました。コロナ禍にあってタイムリーな導入となりましたが、何もコロナ感染拡大があって急遽買い入れたわけではありません。数年前から設置を申請していたのが今年度採択されたのです。この消毒機に目をつけていた図書課の職員・スタッフの先見の明には感服するばかりです。

館長をほぼ二年間務めて痛感したのは、図書館というのは組織の一部門であり、予算に縛られるという自明の事実です。もし予算が現行の２倍あったとしたら、利用者には今以上に満足していただけるはずです。しかし、それは無理ですので、図書課の職員・スタッフは限られた枠内で、いかにして必要な図書資料を購入し、利用者に良質のサービスを提供するか日々奮闘しているのです。

先日、３・４年ゼミナール担当のある先生から、学生はデータベース・電子ジャーナルをほとんど利用していませんよ、と言われました。館長としては学生諸君にはどのような形であれ今以上に図書館を利用して頂きたいと思っています。利用頻度が高くなればなるほど、先に触れた図書関連予算について法人との折衝もしやすくなるからです。結局、図書館を利用すればするほど図書館はさらに充実し、利用しやすいものとなってゆくのです。

最後になりましたが、図書館に関する忌憚のないご意見・ご要望などお聞かせ下さい。少しでも利用しやすい良い図書館にしてゆきたいと考えています。

図 書 館 昔 々

文学部国文学科　教授　山崎　正伸

1969 年４月に入学しました。入学式での加藤常賢学長の祝辞の中で、二松学舎大学の図書館は小さいが、近くに日本一の国会図書館と、開架式でしかも購入できる神保町の古書店街があると言われて感激しました。授業が始まって、図書館？図書室？高等学校より小さい、蔵書も少ない。お宝捜しで書庫に入れてもらいましたが、三島中洲先生の儀礼の注疏本に朱が施してあるのを見つけただけでした。それからは、ほぼ毎日神保町の古書店街をほっつき歩きました。毎日が新しいことの発見で、日々面白く楽しかったと記憶しています。書庫の前の廊下の向かい側は、学長室でした。正確に言うと、文学部しかありませんでしたから、学長室兼学部長室でした。一年次の文学部長は、内田泉之助先生でした。唐詩選と中国文学史を受けました。内田先生は下戸、お酒が飲めませんでした。私が余程飲兵衛に見えたのでしょうか、「飲酒」の漢詩の解釈のたびに、酒飲みの心が伝わりますか、と。もちろん「はい」と答えました。授業後に、たまに、学部長室にお供をすると、奥が、加藤学長の机でした。机の上に卓上ベルがありました。本も積み上げられていました。二年次に、加藤先生の授業がありました。最初の一言に感動しました。しかし、第２回目の授業で、その感動は消えてしまいました。でも、卓上ベルを貸してくださいとお願いしたら、もっていけ、何時お返ししたらよろしいですか、とお伺いしたら、いらなくなったら持ってこいと、ぶっきらぼうのようですが、慈愛の目でおっしゃいました。

一年次に、大谷光男先生に、麦酒とピクルスに釣られて、研究会を立ち上げることになりました。大谷先生から、二年次に紹介をしていただいて、静嘉堂文庫に行くようになりました。油引きの床の匂い、夏なのに窓から入る風は涼しく、まるで、避暑地に行っているような錯覚に陥るような文庫でした。いろいろと出してくださって、平仲物語も読みました。何を見ても驚きの文庫でした。後年のこと、学生を連れての文学散歩の行事で伺いました。その時、平仲物語の話をしましたら、文庫の方から、もしかしたら、本物を出した最後かと。今は複製を出しています、と言われました。

二年次の日常は、多くの時間をトヨタのビルの地下にあったハイツという喫茶店と、神保町で過ごすことになりました。二年三年次の夏休みは、静嘉堂文庫で。これも後年のことですが、たまにお話しできた、大谷先生の紹介状の宛名の丸山季夫先生、清水浜臣のことを書いた時に『泊洒舎年譜』を読んで、ああ、富山出身の方だったのだと、富山の話もしたかったと思いました。三年次の冬休みに１度目の失明を経験しました。このことがなければ、それまでの計画に則っていたと思いますが、失明して監察医の説明を聞いて、ほぼ一月考えに考えて、絶対にならないと言い続け、そう決めていた職業を、生活の糧にと選びました。その準備に、四年次を２度遣る、卒業を延期すると決めて、母親に決めたことを了解してもらいました。しかし、夏休みに、また計画に少々の変更が加わりました。職に就くことを２年延長して、４年間で学部を卒業することにしました。

1973 年に大学院修士課程に進学しました。入学式は、都立高校の非常勤と重なって欠席しました。そして、1975 年博士課程に進みました。この時も、都立高校の非常勤と重なって入学式を欠席しました。この大学院の五年間は、大学院と３・４校の都立高校の非常勤の掛け持ちと、神保町の古書店巡りという生活でした。

1978 年に３月に博士課程を満期退学して、都立高校の非常勤も辞して、４月から二松学舎大学の助手になりました。そして、入学式を迎えました。加藤学長の祝辞は、二松学舎大学の図書館は小さいが、近くに……、でした。

「思い出すままに」

文学部国文学科　教授　磯　水絵

私は二松学舎大学の出身である。したがって、図書館の思い出は、学部時代からに遡る。父がよく本は買ってくれていたから、実は学部前半にはあまり図書館に行った記憶がない。新潮の日本文学全集、世界文学全集、筑摩の古典の訳本が高校時代から私の書架には並んでいた。大学入学後、初めて購入したのは岩波の古典文学大系の記紀、風土記で、それは日本文学史のレポートを書くための資料としてであったが、借りるという考えは毛頭なく、信山社で父と落ち合って購入、持ち帰ってもらった。それで雨海博洋先生へのレポートを書いた。

頻繁に図書館―いや、当時は図書室であった―に通うようになったのはゼミナールに所属してからのことである。閉架式で、閲覧室には大きな机が並んでおり、皆の使う辞書類は、その机間を巡って探し出し、使用している学生に、次は私と頼んだものである。山崎正伸さんが雨海研究室の鍵を預かっていたから、図書館が開かない朝の内は、研究室で『尊卑分脈』を見せてもらっていたものである。大学院後期は中国学に代わったから漢文の読解に苦労したが、後に夫となる高志が図書館員になっていたから館員の方々と懇意になり、読めない処は、当時図書館に勤務されていた中文の院出身の先輩に教えていただいたものである。赤塚忠先生の『詩経』読解の原稿を清書させていただいたのが忘れられない。その頃は、図書室が論文執筆の場となっていたが、広い机が大いに役に立った。

さて、本学に就職した当座は、図書室のある２階に研究室が配されたので便利であったが、院生の頃から午前中は東京大学史料編纂所か国会図書館に行くことを常としていた。二松は閉架式で面倒であった。それでも、雑誌類が比較的に充実していたから、午後は二松の図書室で論文コピーに勤しんだ。その他に、週に１度は上野学園大学日本音楽資料室や宮内庁書陵部に伺い、多くの貴重な写本類を調査できたのは、まさに地の利である。

校舎が新しくなって、図書室が図書館に昇格しても、私の営為に変わりはなかったが、演習で徒然草を学ぶ学生のために、「資料検索の手引き」を作成し、図書館の使い方を指導したが、それは昨年まで神田邦彦講師に引き継がれて改訂版が何度も作成されていた。

恩師の貴志正造先生が、女性は一時図書館に通えなくなる時期がくる。だから、本は手元に置いておけという指導をされたから、我が家の書庫は充実しており、確かに子育て中には便利であった。折しもワードプロセッサーが開発されて、子供を膝に片手でワープロを叩くことができるようになったのも僥倖であった。

柏校舎の図書館がもっと使われるようになればと思う。夏休みなど、定期を買って通うのもよい。

堅いことばかりを書いたが、図書館は青春そのものであった。高志との待ち合わせはいつも図書館であったし、長期の休みには図書館がまさに教室がわりであった。常連がいつもの席を占め、いつもの文献を開いている。『和歌文学大辞典』はあそこの席、『平安時代史事典』は奥のあそこ、という具合に皆察しがついていて、そこに借りに行くのであった。

長期休暇の昼食には外に出たが、その折には千鳥ヶ淵や靖国神社の裏庭に足をのばしたり、古書店街に遠征したりもしたものである。小さいが、国文学を学ぶにはまあまあ事足りるし、何より便利である。現在の館員の方々はプロフェッショナルで、的確に検索の助けに当たってくれる。書架の充実にはいつまでも満足はできないと思うが、家庭的で、国文学の人間にはうれしい図書館である。コロナ禍の中、善戦してくれているのは感謝である。

斯文会所蔵品の譲渡受入れについて

文学部中国文学科　教授　町　泉寿郎

このたび本学では公益財団法人斯文会からその所蔵する文物の譲渡を受けた。ここに、その譲渡に至る経緯と資料の概要について記しておきたい。

まず斯文会の略史から起筆しよう。斯文会は国指定の史跡湯島聖堂（1922 年指定）の指定管理団体である。湯島聖堂は５代将軍綱吉の治世である元禄３年（1690）にそれまで上野忍岡の林家別邸にあった孔子廟（聖堂）を駿河台に移して幕府直轄としたのを起源とし、寛政改革の一環として聖堂附属の講堂・学寮が拡張されて直轄の学問所となった。維新後、明治新政府に接収されて文部省管轄となり、和漢学の教育研究機関としてしばらく存続し、明治４年（1871）に廃止された。その後、講堂・学寮は東京師範学校となり、聖堂は博覧会場や東京書籍館となり、更に（東京）高等師範学校附属の東京教育博物館となった。関東大震災に焼失し、昭和６年（1931）に再建されて今日に至る。

平成 30 年（2018）に財団創立百周年を迎えた斯文会は、大正７年（1918）に斯文学会（1880 設立）、研経会（1899 設立）、孔子祭典会（1907 設立）、東亜学術研究会（1909 設立）、漢文学会（1910 設立）などの漢文教育や東洋古典学の関連諸団体を統合して設立された。史蹟湯島聖堂における孔子祭祀と古典講座を主要な活動とする斯文会の今に続くあり方は近代における漢学の再編と変容を示す点においてユニークかつ貴重なものである。

斯文会と二松学舎の関係は、一口に述べ尽くすことのできないものがあるが、一例を挙げれば、現在の九段校舎１号館を建設中の平成 14・15 年（2002・2003）度、大学院文学研究科の授業は湯島聖堂の土地を借用したプレハブの建物で行われた。当時、筆者も非常勤講師として出講した経験がある。

斯文会では財団創立百周年記念事業のひとつとして、図録『湯島聖堂と斯文会の軌跡』（2019 年５月刊）の刊行を計画し、筆者は石川忠久先生（斯文会前理事長）から実行委員として図録編纂に協力するよう依頼された。鷲野正明（国士舘大学教授）・河内利治（大東文化大学教授）と筆者は、斯文会の平正路事務局長・岩城公子事務局主任とともにその編纂に当たり、掲載資料の選定や解説の執筆のほかコラムを執筆した。

その後 2019 年 12 月、斯文会から本学に所蔵資料の一部譲渡の打診があり、双方で協議のうえその譲渡受け入れに至った。斯文会から本学に譲渡された文物は、日本の儒者・漢学者の書幅を中心に 388 点を数える。その大半は同会が関係者より譲渡・寄贈を受けたものである。斯文会では「一儒一品」の基準で収集したと聞き及んでおり、「一儒一品」である以上どの部分が特に充実しているとは言い難く、揃っていること自体に漢学史上の価値があるが、敢えて目についたものを挙げれば、林大学頭家歴代の書（林羅山・林鵞峰・林鳳岡・林榴岡・林鳳谷・林述斎・林檉宇・林復斎・林学斎）や古義堂伊藤家の書（伊藤仁斎・伊藤東涯・伊藤梅宇・伊藤介亭・伊藤竹里・伊藤蘭嵎）が揃っており、林羅山の師藤原惺窩の書簡、新井白蛾の肖像画、市野迷庵の書幅などは稀少で史料価値がある。また故内山知也教授が長年、機関誌『斯文』において斯文会所蔵書画の紹介に努められたことも、本コレクションにとって逸すべからざる由緒と言える。

東条一堂や亀田鵬斎など幕末儒者たちの書も多く、光格天皇・徳川斉昭ら江戸期貴顕の書、また塩谷温・宇野哲人・諸橋轍次ら近代漢学者の書、澁澤栄一・嘉納治五郎・斎藤拙堂・佐藤一斎・山田方谷・三島中洲など本学ゆかりの人物の書も含まれている。今後は、先儒祭など斯文会の行事への貸与をはじめとして、学内外の組織とも連携し、資料の公開と有効活用に努めていきたいと考えている。

新入生にお薦めの本

（価格はすべて税込、2021年２月現在）

文学部国文学科　教授 瀧田　浩

①『現代社会の理論 ― 情報化・消費化社会の現在と未来 ― 』（岩波新書465）

著　者：見田宗介　発行所：岩波書店　1996 年　880 円

②『野生の思考』

著　者：クロード・レヴィ＝ストロース　翻　訳：大橋保夫
発行所：みすず書房　1976 年　5,280 円

③『ロストハウス』

著　者：大島弓子
発行所：角川書店　1995 年（絶版）。　白泉社文庫で 2001 年復刊　681 円

今回は、学問の世界に入ってきた愛すべき新入生に「不透明で困難な現代を生きる上で、これを知ると知らぬとでは全然違う」という本を紹介します。

①は、現在活躍する多くの社会学者たちの師匠にあたる見田宗介が東大を定年で退職する前にまとめた本。現代社会における問題のありかと解決の方向を大胆・緻密にまとめています。刊行時に「バタイユの〈消尽〉の思想が南北問題と接続するとは！」と衝撃を受け、今でも僕の現代社会観の基盤はこの本。②は、構造主義の第一人者による代表的な著作。読了に二か月くらいかかり、千箇所以上傍線を引いて理解に努めました。人類学の専門書なので、ハラリが書いた『サピエンス全史』のように愉しみながら読むのは難しいけれど、「人間中心主義や近代的価値観からの解放」という意味では似て、インパクトは強烈。③は大島弓子後期の短編マンガ作品集。橋本治・吉本ばなな・穂村弘など現代日本文化の支柱となった人物たちを強くインスパイアした、言葉と画が繊細に融合した表現に触れてほしいと思います。有名な『綿の国星』以後も傑作が多いです。

「ほんとうに切実な問いと、根柢をめざす思考と、地についた方法」（①「おわりに」末尾）を求める若者たちの読書生活が豊かなものになりますように。

文学部中国文学科　教授 王 宝 平

①『菊と刀：日本文化の型』（講談社学術文庫1708）

著　者：ルース・ベネディクト　訳　者：長谷川松治　発行所：講談社　2005 年　1,441 円

②『「縮み」志向の日本人』

編　者：李御寧　発行所：学生社　1982 年　（絶版）。　講談社学術文庫で 2007 年復刊　1,386 円

③『日本談義集』（東洋文庫701）

著　者：周作人　訳　者：木山英雄
発行所：平凡社　2002 年　3,300 円

皆さんが本学の「学生」になってから、またたく間に一年が経過しようとしています。好奇心旺盛は、新入生の皆さんの特権かもしれません。ここに外国人の目線から見た日本に関する図書を紹介します。①は著名なアメリカ人文化人類学者のルース・ベネディクトの戦時中の調査研究をもとに 1946 年に出版された本です。本書は日本文化論に興味を持つ人にとってもはや古典のような存在であり、日本文化研究は『菊と刀』抜きに考えられないほど重要な意味を持っています。②は韓国学者の日本文化論で、韓国と比較しながら、俳句、茶の湯、盆栽、一寸法師、扇子、折り詰め弁当、パチンコなどについて日本文化の特徴を鋭く指摘している名著です。その縦横無尽な日本語力や日本文化に対する理解力からは、よい刺激を受けるでしょう。③は魯迅の弟による日本文化・日本文学論であり、特に繊細で日本理解の行き届いた点において、今日こそ味わい直すべきものです。

文学部都市文化デザイン学科　特別招聘教授 堀野正人

①『パパラギ ー はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』(SB文庫)

著　者：エーリッヒ・ショイルマン　発行所：SB クリエイティブ株式会社　2009 年　660 円

服装、時間、貨幣、職業など、私たちの身の回りにある近代文明を、平易な文章でユーモラスに批判する本。100 年前に刊行された本でありながら、現代にも通用する内容は一読の価値あり。

②『深夜特急1 ー香港・マカオー〈文字拡大増補新版〉』(新潮文庫)

著　者：沢木耕太郎　発行所：新潮社　2020 年　605 円

インドのデリーからイギリスのロンドンまで、乗合いバスで行ってみることだけを目的に旅をする若者の物語。行く先々で起きるハプニングや現地の人びととの交流が、自分自身を見つめさせる。コロナ禍で海外旅行が困難な今、バックパッカー気分で旅の醍醐味を味わってみては。

③『「やりがいのある仕事」という幻想』(朝日新書)

著　者：森　博嗣　発行所：朝日新聞出版　2013 年　836 円

いわゆるハウツー本ではまったくない。「人は働くために生きているのではない」「やりたいことや、好きなことで選ぶよりも、自分が向いている仕事を選択する方が合理的だ」と筆者はいう。肩の力を抜いて、就活や自分の生き方を見つめなおせるかもしれない。

国際政治経済学部国際経営学科　准教授 小具龍史

①『君たちはどう生きるか』(岩波文庫)

著　者：吉野源三郎
発行所：岩波書店　1982 年　1,067 円

私も皆さんと同じ大学 1 年生の時にこの本と出会いました。軍国主義が強まる 1930 年代の日本が舞台の小説で、コペル君という中学生が、叔父さんからの手紙をきっかけに、自身の周りで起きる貧困やいじめ、格差など、社会の様々な現象を理解していくストーリーとなっています。初版から 80 年以上が経った今もなお、こうしたテーマに対峙し、どう生きるべきかということを考えさせてくれる書籍です。是非手に取って読んでみて下さい。

②『新版 問題解決プロフェッショナル ー 思考と技術』

著　者：齋藤嘉則　発行所：ダイヤモンド社　2010 年　2,563 円

表題の通り、まさに「問題」を「解決」する方法について、豊富な事例を交えて体系的に書かれた“考え方”の入門書です。この本を初めて読んだときに「問題ってちゃんと解決できるんだ！」と衝撃を受けたことを憶えています。これからを生きる皆さんにとって必要となる一生モノのスキルが学べる一冊です。

③『最新500項目 経営学用語ハンドブック』

編著者：亀川雅人
発行所：創成社　2019 年　1,320 円

最新の 500 項目からなる経営学の主要な用語をきっかけとして、経営学の各分野（コーポレートガバナンス、経営戦略、組織、リーダーシップ、モチベーション、マーケティング、生産管理、情報管理、財務会計等）の基礎知識を身に付けることができます。初めて経営学を学ぶ新入生の皆さんにおススメの一冊です。

教職課程　教授 岡田哲也

①『新版「生きるに値しない命」とは誰のことか　ナチス安楽死思想の原典からの考察』(中公選書)

著　者：森下直貴　編著者：佐野　誠　発行所：中央公論新社　2020 年　1,760 円

国家にとって「役に立つ」か「役に立たない」かで人の命を選別した時代がありました。ユダヤ民族の虐殺の前にドイツで行われた T−4 作戦といわれる障害者虐殺作戦の理論的支柱となった原典の翻訳と評注によりその意味を問うものです。

②『死霊Ⅰ～Ⅲ』(講談社文芸文庫)

著　者：埴谷雄高
発行所：講談社　2003 年　各 1,540 円

青年期におそらく多くの人が向かい合う「『存在』とは何か？」「あることとは何か？」「ないこととは何か？」「生と死の意味とは？」という問題があります。そういう存在の根源に関わる問題に作者の人生をかけて取り組んだ珍しい小説です。

③『冬の旅』(新潮文庫)

著　者：立原正秋
発行所：新潮社　1973 年　1,034 円

母を守るために義兄を刺し、弁解をせずに少年院に入った少年が、再び義父と母を守るために義兄を刺して少年院に戻り、社会復帰を目指す途中で亡くなるという話です。自分が中学校教員の時に、暴力を繰り返し、２度少年院に入った生徒を担当した頃に読みました。その生徒も亡くなりましたが、書店で本を見るとその生徒から『おまえは俺の担任だった！』と突きつけられている気がします。

書評キャンパス

2019 年度から千代田区立千代田図書館と千代田区内の大学との連携事業として始まった「書評キャンパス」が、今年度も「週刊読書人」の協力のもと行われました。下表のとおり８名の学生の執筆した書評が、「週刊読書人」新聞に掲載されました。

今後、これらの書評は千代田区立千代田図書館と本学に展示されます。

「週刊読書人」掲載日	書　名	氏　名
10 月 2 日付（第 3359 号）	綿矢りさ 著『憤死』（河出書房新社）	文学部国文学科３年　関谷春香
10 月 16 日付（第 3361 号）	有栖川有栖 著『朱色の研究』（角川文庫）	文学部国文学科３年　宮下夏実
11 月 20 日付（第 3366 号）	辻村深月 著『子どもたちは夜と遊ぶ（上・下）』（講談社文庫）	文学部国文学科２年　佐藤みゆ
1 月 1 日付（第 3371 号）	百田尚樹 著『海賊とよばれた男（上・下）』（講談社）	文学部国文学科１年　小松真由香
1 月 22 日付（第 3374 号）	誉田哲也 著『主よ、永遠の休息を』（中公文庫）	文学部中国文学科３年　榎本圭扇
1 月 29 日付（第 3375 号）	乙一 著『暗いところで待ち合わせ』（幻冬舎文庫）	文学部国文学科３年　大谷美尋
2 月 5 日付（第 3376 号）	ブレイディみかこ 著『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）	文学部国文学科１年　福留舞
2 月 19 日付（第 3378 号）	Jam 著『多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ』（サンクチュアリ出版）	文学部国文学科３年　磯部春香

【電子ジャーナル・電子書籍検索システム】を使ってみよう!

図書館ホームページに【電子ジャーナル・電子書籍検索システム（Publication Finder)】（図１、赤枠部分）が加わりました。

図１

図１の赤枠をクリックすると、図２の検索画面が表示されます。検索方法は２通りあります。

①検索ボックスにタイトルやキーワードを入力

②分野から選択する

例えば検索ボックスに「中国」と入れて検索すると、図３のような結果が出てきます。各検索結果の一番下にリンク先が表示されます。

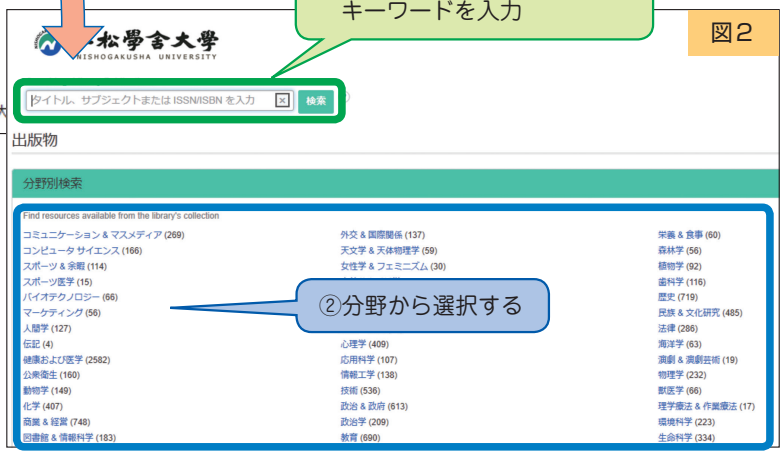


図２

図３

「京都大学学術情報リポジトリ」の該当箇所が表示され、PDF で閲覧できます。

「Maruzen eBook Library」とあれば、クリックすると、本学の電子書籍を閲覧できます。

「東洋経済デジタルコンテンツ・ライブラリー」とあれば、クリックすると、本学が契約しているデータベースのログイン画面が表示されます。

この検索システムから閲覧できるものは、図書や雑誌を電子化したものばかりではありません。検索ボックスに「万葉集」と入れて検索をすると、図４のようなタイトルがヒットします。リンク先をクリックしてみると、国際日本文化研究センターのオープンアクセスが表示され、図４の結果が会議の発表論文であったことがわかります。さらに「源氏物語」で検索してみると、図５のように「古写本『源氏物語』触読研究ジャーナル」という結果が出ます。これは一体何だろうとリンク先をクリックすると、国文学研究資料館が発行しているオンラインジャーナルであることがわかります。このオンラインジャーナルは、ISSN（国際標準逐次刊行物番号）も付与されていますが、CiNii Books でこの ISSN を検索してもヒットしません。この検索システムを使う必要があります。

図４

図５

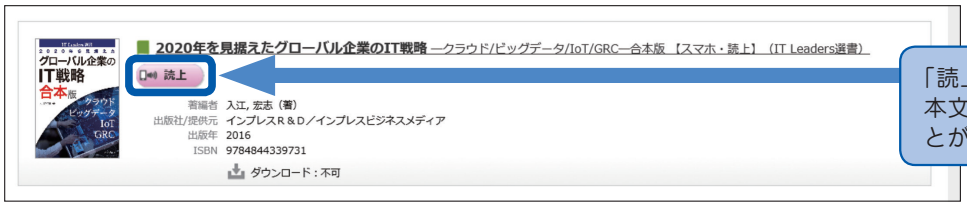
このように、今回導入した【電子ジャーナル・電子書籍検索システム】を活用すると、いろいろな電子媒体にアクセスできることが、お分かりいただけたと思います。思わぬ文献に出会えるかも知れません。皆様もぜひ検索してみてください。

Maruzen eBook Library を使いこなそう!

2021年2月末現在、本学の学生・教職員の皆さんは1,308点の電子書籍を利用することができます。冊子とは違い、返却期限日を気にする必要がありません。また、冊子は他の利用者が借用中の場合は、予約を入れて返却されるまで待たなければなりませんが、電子書籍は他の利用者の閲覧が済めば、すぐに読むことができます。ぜひ電子書籍を活用してください。

【一般的な利用方法】

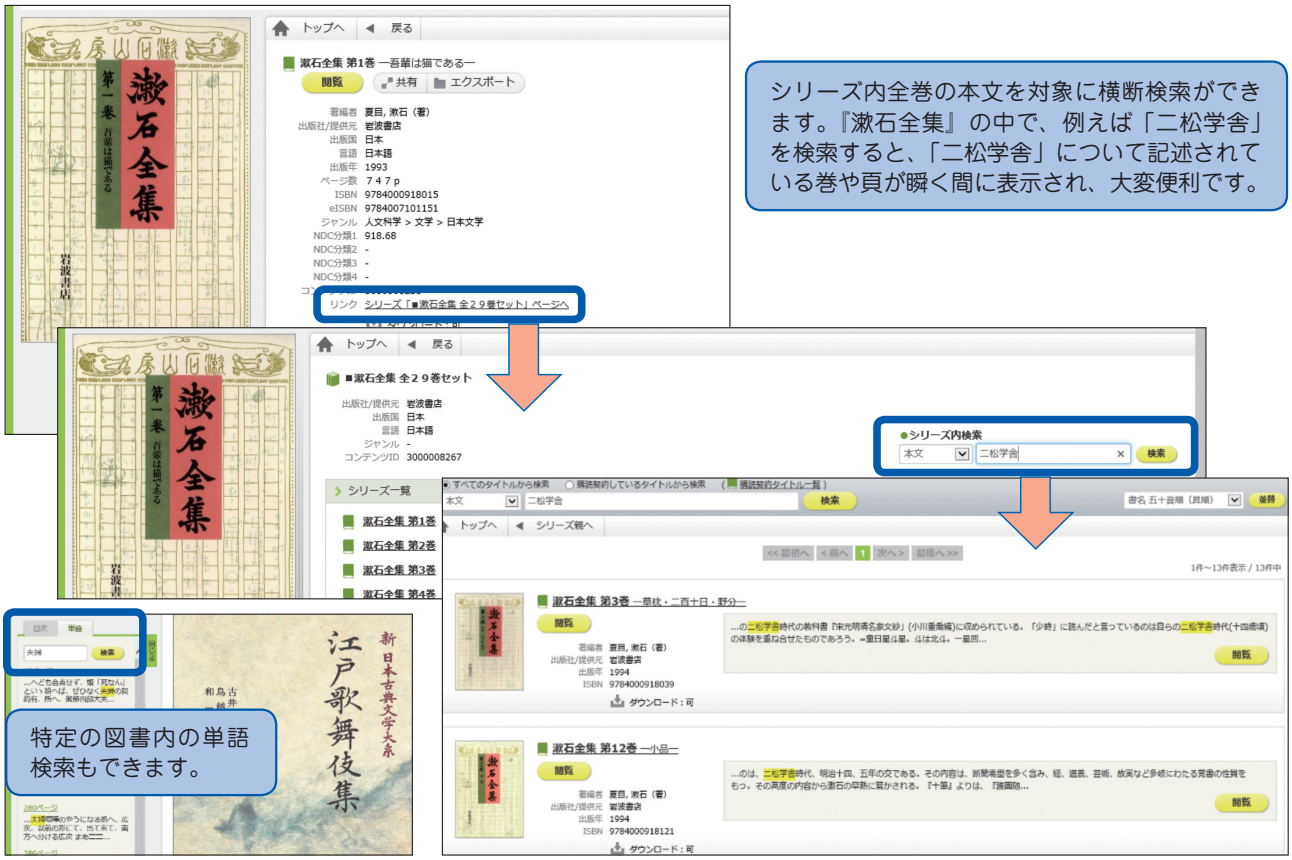
【便利機能紹介1　音声読み上げ機能】



【便利機能紹介2　共有機能】

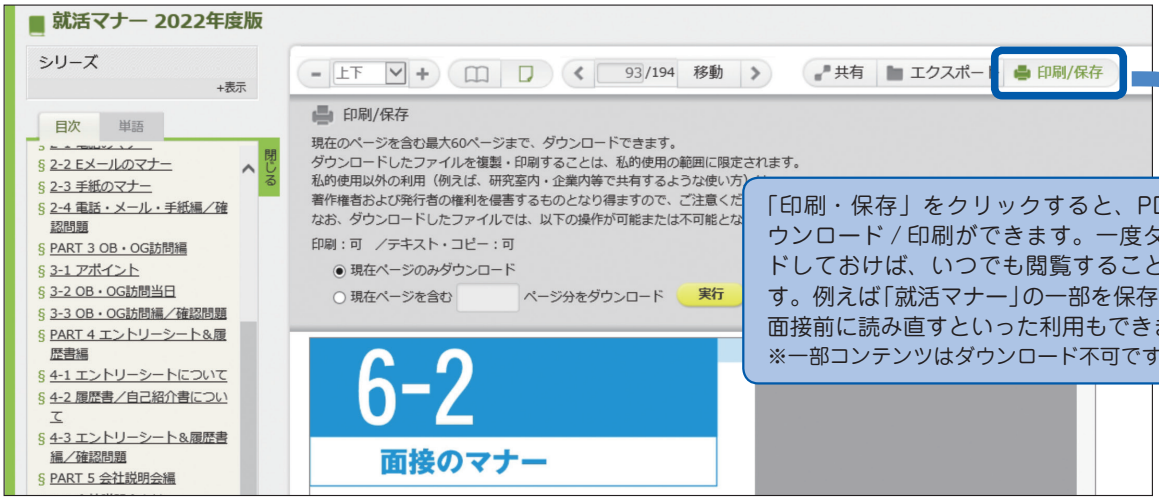
「共有」タグをクリックすると、現在閲覧している書名と「ページURL」が表示されます。このURLをメールやSNSで共有することで、学生は友人と分担してレジュメ等を作成したり、先生は授業の事前課題を指定したりすることができます。

【便利機能紹介3　シリーズ内検索機能】



シリーズ内全巻の本文を対象に横断検索ができます。『漱石全集』の中で、例えば「二松学舎」を検索すると、「二松学舎」について記述されている巻や頁が瞬く間に表示され、大変便利です。

【便利機能紹介4　本文のダウンロード機能】



「印刷・保存」をクリックすると、PDF にてダウンロード / 印刷ができます。一度ダウンロードしておけば、いつでも閲覧することができます。例えば「就活マナー」の一部を保存しておき、面接前に読み直すといった利用もできます。
※一部コンテンツはダウンロード不可です。

【便利機能紹介5　リクエスト機能】

「全てのタイトルから検索」し、もし電子書籍で購入して欲しい資料があれば、「リクエスト」をクリックして必要事項を入力してください。

本学教職員著書紹介

『南方の志士と日本人
インドネシア独立の夢と昭和のナショナリズム』

林　英一 著
（筑摩書房、2019 年 9 月 15 日発行）
四六判　220 頁・1,500 円＋税
ISBN：9784480016867

皆さんは、インドネシア人初の日本留学生の存在をご存じでしょうか。

スマトラ島出身のふたりの青年ウスマンとガウスが来日したのは、日本が国際連盟を脱退し、東京音頭がヒットした 1933 年のことでした。ウスマンは明治大学、ガウスは東京慈恵会医科大学に籍をおきながら、右翼の頭山満、インド人革命家のラース・ビハーリー・ボースらアジア主義者たちと交流し、在日インドネシア留学生会を世話しました。

アジア・太平洋戦争下、日本軍が東南アジアを占領すると、記者ウスマンと医師ガウスは軍政への協力と抵抗のあいだで揺れ動きながら、インドネシアの独立を求めてそれぞれ奮闘しました。

ウスマンには留学中に出会い、インドネシアに連れ帰って結婚した長田露子という日本人女性がいました。山梨県の大地主の家に生まれ日本女子大学で学んだ長田は、両親の反対を押しのけ、1936 年、当時オランダ領東インドといわれたインドネシアに渡りました。その後、1955 年にウスマンが亡くなるまで寄り添いました。

私がインドネシアで長田さんにお話を伺ったのは、2010 年のことでした。当時は日本学術振興会の若手研究者海外派遣事業でジョクジャカルタのガジャ・マダ大学人文学部歴史学科に受け入れられていました。首都ジャカルタに出る際は決まって元残留日本兵の長男一家のご自宅に居候していました。

ある日、日本の現地特派員の知人から電話があり、居候先の近所に長田さんというご老人がいると教えてもらいました。興味をもって訪ねると、長田さんとご息女の質問攻めにあいました。

３年前に現地で長田さんのインドネシア語回想記が出版され、取り寄せて読みました。壮絶な体験に驚くとともに、考証に欠ける部分が目につきました。そこでインドネシアでの調査経験と日本側に残された資史料を手がかりに、ウスマンとガウスの伝記的研究として編んだのが本書です。戦後 75 年。日本の留学生政策が転換期を迎える今、インドネシア人留学生のはじまりの物語に立ち返ることには意義があると考えられます。

文学部国文学科　専任講師　林　英一

編集後記

「季報」109 号をお届けします。

コロナ禍の中、11 月 26 日東葛地区大学図書館コンソーシアム（TULC）のリモート会議が行なわれ、本学図書館が議長を務めました。加盟大学のそれぞれのコロナ対応について活発な意見交換があり、情報の共有ができました。

現在利用者の方々には何かとご不便をおかけしております。工夫してコロナ終息まで乗り切りたいと思います。（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 109 号
発行日　2021 年 3 月 15 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333